

## 体験談②

### 『孫に語り伝える戦火のむなしさ』

川崎 進(かわさき すすむ) (84歳)

私は、29 歳まで川西市栄根宗近で育った。現在の「すし半さと」・「小花モータープール」の道路隔て斜め向かい「後北酒店」と「食糧事務所」あり、南隣 5 軒長屋でした。自宅前からは、一面たんぼで、川西市立小学校の北校舎と講堂と福知山線(単線)踏切が見えていた。

1945年、川西市においても戦争の状況は悪くなった。空襲警報が鳴り響くと長袖に防空ずきん、ゲートルを巻いて防空壕へ。夜は明かりが漏れないように電灯のかさに布をかける。そんな毎日が続いた。私は小学校 2 年生だった。

ある日、遠くの空に飛行機の編隊が見えた。それに向かって打ち上げ花火のようなものがさく裂しているが、飛行機には届いていなかった。それが大阪大空襲だった。梅田のあたりは焼け野原になっていた。

戦後、後学のためと父親に連れられて、梅田に出掛けた。阪急デパート前からは、一面焼け野原で難波方面まで一望できたのには驚いていた。残存建物は、ビルと蔵がポツンと残っていた。現在の阪神デパート裏側には、ヤミ市が多く出店。はじめて「豚まん」を買ってくれたが、中身の肉はなにか分からず、かぶりついていた。

当時、食料は配給制。母親達が集まり分配していた。配給米も米穀通帳範囲。主食は麦飯(匂いが嫌だった)米粒が数える程の中に、豆カス・さつまいも等を入れて量目合わせた麦飯。魚は脂の

回った鯖・鰯の干物。食べるものがなくひもじい思いでした。

五人家族、配給食糧だけでは厳しく、父親は、母の着物を持ち出し、米と交換する食糧調達に日々自転車で奔走。ある日、父親がどこで入手したのか、進駐軍携帯食を数個持ち帰ってきた。銀紙に包まれたチョコレート。硬くて歯が立たず母親が、包丁で分割。兄弟が台所の隅でこっそりと食べていた。

物不足の時代に、初めてほろ苦い風味と香りを味わい食糧難の時代に珍しいものを味わわせてくれた亡き父に感謝。現在では考えられない過酷な生活状況で、想いめぐると何となく郷愁を感じる。